

用手法から機械化の時代変化へ 次世代に伝えたいこと ～サステナブルな臨床検査技師を目指して～

◎新開 幸夫¹⁾

地方独立行政法人 佐賀県医療センター好生館¹⁾

日本では、すでに人口減少が始まり主な先進国では最も早い超高齢化社会となっている。その影響で様々な業種で変革が行われ、私たちが働いている医療業界でも、体制の見直しが進められている。

臨床検査技師は、誕生して約半世紀がたち、これまでの医療の発展、変化に寄与し続けてきた。そして現在、私たちも働き方や業務の内容に、変化が求められている。

最近では、医療法改定により検体採取や味覚検査などの業務の拡大が図られた。また、まだ終息していない新型コロナウイルスのパンデミックでは、検体採取や新型コロナウイルスの検出、ワクチン接種などの業務を担い、その結果、今までメディアには取り上げられなかった臨床検査技師が取り上げられ世間に注目されるようになった。そして、新たな課題としてタスクシフトや臨地実習に直面している。

しかし、このような変化は、以前から常に存在したと思われる。諸先輩方は、臨床検査を築きそれを変化させ、私たちたちが継承している。諸先輩方が築いてこられた礎は、貴重で、重要であることは変わらない。

今後 AI が導入され、さらに機械化、自動化が進み、人が検査に関わることは、今以上に減っていくと思われる。その結果、臨床検査技師としては、今のままでは先細りになってしまうのではないかと、危惧もしている。

諸先輩方の礎を踏まえ、これからのサステナブルな臨床検査技師について、私見を述べたい。